

「どうせ・・・」をなくしたい

～子どもの貧困を考える～

問い合わせ先 本庁舎人権推進課 ☎ 0857-20-3143 〆 0857-20-3052



日本は比較的裕福な社会で、そこで暮らす子どもと貧困が結びつかないという話もよく耳にします。それは貧困を「絶対的貧困」で考えているからです。「絶対的貧困」とは、生活するにあたり最低限必要な食料や生活必需品を購入することができない状態のことです。これは主に発展途上国などに多く見受けられます。それに対して「相対的貧困」とは、その地域や社会において「普通」とされる生活

「相対的貧困」という考え方

2014年に厚生労働省が発表した子どもの貧困率は、過去最悪の16.3%でした。この貧困率は世帯を単位として計算されます。子どもの貧困率は、子ども全体のうち貧困世帯で暮らす子どもの割合で、現在の日本では子ども6人に1人が貧困状態にあります。

子どもの貧困は身近な問題

子どもの支援に関わっている団体の一つである「こどもらぼ」さんに活動について伺いました。

「こどもらぼ」では現在、本市からの委託を受けて、鳥取市人権福祉センター5カ所で週1回の学習支援と、鳥取市人権交流プラザで「とっとりこども食堂（中央人権福祉

「こどもらぼ」の取り組み

を享受することができない状態のことを言います。つまり、「貧困」であるかどうかは、その人が生きている社会の「普通の生活」との比較によって判断されます。周りの子どもも5人ができていないことを自分1人でできているとって大きなダメージとなってしまうのです。

そんな子どもたちの口からは、よく「どうせ・・・」という言葉が発せられます。いま貧困やそれに近い状態に置かれている子どもたちが、これから先の自らの人生までをまあきらめてしまうことがないように支援していくことが必要です。

学習支援にはどのセンターにおいても5人程度、多い所では10人以上の参加があります。中学生の参加が多く、子どもたちのもつ背景はさまざまです。「こどもらぼ」では、単に学力向上を目的とした支援を行うのではなく、子どもたちが抱える学校生活や進路における悩みや困りごとを話してもらえるような関係を築くよう努めています。

センターと共催しを運営しています。

とっとりこども食堂

と き 毎週火曜日 17:00～18:30
※学習支援 18:30～20:30

ところ 鳥取市人権交流プラザ

対 象 小学生高学年～中学生

【ご支援のお願い】

こども食堂では、安全でおいしいご飯の提供を継続するために、みなさんからのご支援・ご寄付をお願いしております。ご協力いただける人は、メールまたはお電話にてご連絡をいただけますと幸いです。

【連絡先】
鳥取市中央人権福祉センター
☎ 0857-24-8241 〆 0857-24-8067
jin-chuo@city.tottori.lg.jp

「こどもらぼ」生活困窮者自立促進事業モデル事業により、現在、主に鳥取市から受託し、子どもの学習支援活動を実施しています。☎ 080-1905-5807 (衣笠)



おめでとーうーざーいーますー！ 第41回 鳥取市文化賞

11月3日、市の文化・芸術の振興に功績のあった人をたたえる「鳥取市文化賞」の贈呈式が仁風閣で行われました。

この度は、次のみなさんが受賞されました。
本庁舎文化交流課 ☎ 0857-20-3226 〆 0857-20-3040



【工芸】
なかやま かんじ
中山 勘治さん
92歳 (湖山町)

因幡地方に伝わる「麒麟獅子舞」。その姿と舞いは幽玄で神秘的、なおかつ他で見ることのできない独特の民俗芸能である。氏は、長年の木彫の経験を活かし、平成3年から麒麟獅子頭の制作に着手。現在まで22体を制作し、41体の修理を手掛けた。各地に伝わる麒麟獅子頭には、一つひとつ表情があり、氏はそれぞれの違いや特徴をとらえ、細かいところまで復元する。麒麟獅子舞を継承する地元において欠かすことのできない存在で、その業績により平成21年度高円宮殿下記念地域伝統芸能大賞支援賞を受賞した。本市における麒麟獅子舞の継承には、氏の卓越した技術の支えがあったからこそであり、本市の文化振興に貢献された業績は大きい。



【洋画】
やまね ふみこ
山根 文子さん
66歳 (若葉台)

昭和24年鳥取市に生まれる。幼少から絵が好きで洋画家を志す。昭和61年、行動展に初出品し入選。その後も全関西行動展で数々の賞を受賞し、注目を集める。行動展本展にも優れた作品を発表し、平成19年には会友賞を受賞、高い評価を得る。洋画でありながら「桃山」「さくらさくら」など「和」をテーマにした作品も展開。時に画面が混沌としながらも新鮮に感じた風景や心象を大きなスケールで熱っぽく語りかける天然と交歓するエモーションが持ち味であり、魅力である。本市を会場とした個展、グループ展を意欲的に開催し、鳥取洋画界の向上、発展に大きく貢献するとともに、今後の活躍が大いに期待される。



【地域史】
こやま ふうみお
小山 富見男さん
64歳 (布勢)

高校の社会科教員として長年にわたり教育に従事。一方で、鳥取土族の福島県移住や北海道移住、満蒙開拓の研究を行うなど、鳥取県の歴史に関し幅広い活動を行ってきた。「鳥取県中南米移住史」(共著)、「満蒙開拓と鳥取県～大陸への遥かな夢へ～」では、戦争・敗戦を海外で体験した鳥取県民の苦闘などを、再三、現地に足を運んで調査・聞き取りを行い、その内容を県民にも分かりやすく伝えてきた。鳥取県民の移住に関する研究は、これまであまり手掛けられていなかった分野であったが、氏の精力的な取り組みにより広く同好の士や他分野の人たちを巻き込んで広がりを見せている。その功績は極めて大きい。また、同時に、鳥取・郡山友の会会長や鳥取地域史研究会副会長を務めるなど、研究者の枠を超えた活動も行っており、本市の文化振興に大きく貢献するとともに、今後の活躍が大いに期待される。

の中学校区にあることが望ましいと感じています。また、ひとり親家庭などの高校中途退学率が高いことがあり、高校生の居場所支援も必要となるでしょう。これらの居場所づくりが地域ぐるみで行われることで、生活に困難を抱える子どもたちや家庭が地域から孤立することを防ぐこともできます。

社会の現実に向けて、子どもたちの「どうせ・・・」をなくしていくために、それぞれがそれぞれにできることを見つけていくことが必要だと感じています。